ウィトゲンシュタインのパラドックス

——『探究』の第201節をめぐって——

黒崎　宏

0. はじめに

ウィトゲンシュタインの後期の哲学の解釈は，ソール・A・クリプキ(Saul A. Kripke) の *Wittgenstein on Rules and Private Language ——An Elementary Exposition——*, Basil Blackwell, 1982（黒崎宏訳『ウィトゲンシュタインのパラドックス——規則・私的言語・他人の心——』産業図書　1983）の出版によって，その様相を一変した。『探究』の，それまでは比較的軽く見られがちであった規則に関する部分が，『探究』の核心部分であるとして，『探究』解釈の前面に押し出されてきたのである。そして，従来比較的よく議論の対象にされてきた私的言語に関する部分は，その規則に関する部分のいわば補足であり，再確認である，とされるに至るのである。

クリプキのこのウィトゲンシュタイン解釈は，当然の事ながら，世界の哲学界に大きな波紋を惹き起こし，それを巡って，多くの論考が発表された*。それらの中で，最も大きく，また最も力を込めて書かれたと思われるものに，コリン・マッギン(Colin McGinn) の *Wittgenstein on Meaning——An Interpretation and Evaluation——*, Basil Blackwell 1984（植木哲也・塚原典央・野矢茂樹訳『ウィトゲンシュタインの言語論——クルプキに抗して——』勁草書房　1990）がある。そしてまたノーマン・マルカム (Norman Malcolm) は，最近の著作 *Nothing is Hidden——Wittgenstein's Criticism of his Early Thought——*, Basil Blackwell, 1986（黒崎宏訳『何も隠されてはいない——ウィトゲンシュタインの自己批判——』産業図書　1991）において，一章を割いて，クリプキとマッギンを批判している。

＊黒崎宏「クリプキの『探究』解釈とウィトゲンシュタインの世界」

（「現代思想」臨時増刊号「ウィトゲンシュタイン」1985.12.20）または黒崎宏『科学の誘惑に抗して――ウィトゲンシュタイン的アプローチ――』（勁草書房　1987）の冒頭部分および注（1）を参照。

マルカムとマッギンがクリプキを批判する論点の一つは，ウィトゲンシュタインが「我々のパラドックス」と言うところのパラドックスが，彼にとって真に問題にすべき「パラドックス」であったのか，という事である。クリプキは，それこそが『探究』の核心である，と言い，マルカムとマッギンは，そうではない，と言うのである。この問題は，ウィトゲンシュタイン解釈にとって，大問題である。そこで私は，この問題を私なりに分析してみたい。

1．『探究』の問題の箇所

まず，以下で話題になる『探究』の問題の箇所を訳しておく。

198．「しからば，如何にして規則は私に，私はここにおいて何を為すべきか，を教えるのか。たとえ私が何を為そうと，それでもそれは，何らかの解釈によって，その規則に一致させられ得るのである。」――違う。その様に言われてはならない。そうではなく，次の様に言われなくてはならない。如何なる解釈も，それが解釈するものと共に，空中に浮かんでいるのである。如何なる解釈も，それが解釈するものの支えの役は，果たし得ないのである。解釈だけでは，［それが解釈するものの］意味は決定しないのである。

「だからこそ，たとえ私が何を為そうと，私が為した事は，規則に一致させられ得るのではないのか。」――［そうではない。そう問われてはならない。そうではなく，］私ならば次のように問う。即ち，規則の

表現――例えば，道しるべ――は，私の行為と如何に関わっているのか，両者の間には如何なる結合があるのか，と。――さて，「これに対する解答は，」例えば次の様である。私はこの記号に対して一定の反応をするように訓練されている，そして，私は今そのように反応するのである。

しかし，その様な答えでは，君はただ，［両者の間の］因果的結合を述べているだけであり，また，如何にして我々は今や道しるべに従うという事になったのか，を説明しているだけであって，この記号に従うという事が本来何において成り立っているのかを述べてはいない。そうではない。私はまた，次の様な事をも指摘したのである。人は，道しるべの恒常的使用，道しるべの慣習，が存在する限りにおいてのみ，道しるべに従うのである。

199．我々が「規則に従う」と呼ぶものは，ただ一人の人がその人生においてただ一回だけでも行うことが出来る事であろうか。そしてこれは，「規則に従う」という表現の文法についての注意である。

［答えは，こうである。］ただ一人の人がただ一回だけ或る規則に従った，という事は有り得ない。ただ一回だけ，ただ一つの報告が行われた，ただ一つの命令が与えられた，或いは，ただ一つの理解が行われた，等々，という事は有り得ない。――規則に従うという事，報告をするという事，命令を与えるという事，チェスをするという事，これらは慣習（［恒常的］使用，制度）である。

或る命題を理解するという事は，或る言語を理解する事である。或る言語を理解するという事は，或る技術に習熟する事である。

200．ゲームという事を知らない民族において，二人の人がチェス盤

に向かって座り，チェスの対局における駒の操作をする，しかも［当然起こるべき］あらゆる心的随伴現象を伴って，という事は，勿論考え得る事である。そして，もし我々*がそれを見れば，我々は，彼らはチェスをしている，と言うのではないか。しかし君はここで，チェスの対局が，或る規則によって——例えば，叫び声をあげたり，足を踏み鳴らしたり，といった——通常はゲームを連想させない一連の行動に翻訳される，と考えよ。そして今や彼らは，我々がよく知っている形でチェスをするのではなく，然るべき規則によって或るチェスの対局に翻訳されるように，叫び声をあげたり足を踏み鳴らしたりしなくてはならないのである。この様な場合でもなお我々には，彼らはゲームをしている，と言う傾向があるのではないか。人は，如何なる権利で，そう言えるのであろうか。［如何なる権利でも，そう言えない。］

* 「我々」にアンダーライン（原文はイタリック）が付いている事に注意せよ。ここでの，そしてこの節における以下での「我々」は，第199節を知らない我々の事なのである。

201. 我々のパラドックスはこうであった。規則は行為の仕方を決定できない，何故なら，如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得るから。そして返答は，こうであった。もし，如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得るならば，如何なる行為の仕方もその規則に一致しないようにさせられ得るのであり，それ故ここには，一致も不一致も存在しない。

ここには或る誤解がある，という事は，我々はその思考過程において——それぞれの解釈が，その背後に再び或る解釈を考える迄は，少なくとも一瞬は我々を安心させるかの如くに——解釈に次ぐ解釈をしている

という事の中に，既に示されている。この事を通して我々が示す事は，こうである。規則の或る把握がある。それは，解釈ではなく，規則のそのつどの適用において我々が「規則に従う」と言い「規則に反する」と言う事の中に現れるものである。

それ故，規則に従う行為はすべて解釈である，と言う傾向が存在する。しかし人は，規則の表現を他の表現で置き換える事のみを，「解釈」と呼ぶべきである。

202．それ故，「規則に従う」という事は，［解釈ではなく］実践である。そして，規則に従うと信ずる事は，規則に従う事ではない。そしてそれ故，人は規則に「私的に」従う事は出来ない。何故なら，さもないと，規則に従うと信ずる事が，規則に従う事と同じになろうから。

2．マルカムとマッギンのクリプキ批判

マルカムは『何も隠されてはいない』の第9章においてクリプキを批判し，次の様に言う。

クリプキは言う。

> ウィトゲンシュタインは，或る新しい形の懐疑論を発明した。個人的には私はそれを，かつて哲学が遭遇した最も根源的で独創的な懐疑的問題であると，見なしたい[1]。

クリプキによれば，この新しい形の懐疑論には，「語によって何かを意味するといった事はあり得ない。」[2]という，驚くべき含意があるのであ

る。クリプキは言う。「ウィトゲンシュタインの中心問題は，彼は，如何なる言語も……不可能であり，実際，理解不能である，という事を示してしまったと思われる，という事である[3]。」もしこれが本当であるならば，それは重大問題であろう。

クリプキは，『探究』の如何なる所見から，ウィトゲンシュタインは或る形の哲学的懐疑論を是認していたという印象を得たのであろうか。クリプキは『探究』の第201節に言及し，その冒頭の部分「我々のパラドックスはこうであった。規則は行為の仕方を決定できない，何故なら，如何なる行為の仕方もその規則と一致させられ得るから。」を引いている。クリプキは，ここで述べられた「パラドックス」は「或る新しい形の哲学的懐疑論と見なされ得る[4]」と言うのである。

クリプキがウィトゲンシュタインをこの様に読んだという事は，驚くべき事である。何故ならウィトゲンシュタインは，その第201節の中のすぐ次のパラグラフにおいて，この「パラドックス」は誤解である，と言うのであるから。

> ここには或る誤解がある，という事は，我々はその思考過程において――それぞれの解釈が，その背後に再び或る解釈を考える迄は，少なくとも一瞬は我々を安心させるかの如くに――解釈に次ぐ解釈をしているという事の中に，既に示されている。この事を通して我々が示す事は，こうである。規則の或る把握がある。それは，解釈ではなく，規則のそのつどの適用において我々が「規則に従う」と言い「規則に反する」と言う事の中に現れるものである。(『探究』第201節)

注目すべき大切な事は，ウィトゲンシュタインは，規則の「解釈」とい

う事によって，「規則の表現を他の表現で置き換える」(『探究』第201節)という事を意味している，という事である。彼は，「解釈」という事によって，規則に従った行為を意味しはしないのである。

ウィトゲンシュタインは，如何なる行為の仕方も規則と一致するのだ，というパラドックスを是認してはいなかった。そうではなく彼は，このパラドックスは，もし規則を理解する唯一の道は，それについての解釈を与える事である――即ち，規則の或る定式を他の定式で置き換える事である――とすれば，その結果として生ずるものであろう，と言っていたのである。彼はこの事を既に，それに先立つパラグラフにおいて，明らかにしている。

> 「しからば，如何にして規則は私に，私はここにおいて何を為すべきか，を教えるのか。たとえ私が何を為そうと，それでもそれは，何らかの解釈によって，その規則に一致させられるのである。」――違う。その様に言われてはならない。そうではなく，次の様に言われなくてはならない。如何なる解釈も，それが解釈するものと共に，空中に浮かんでいるのである。如何なる解釈も，それが解釈するものの支えの役は，果たし得ないのである。解釈だけでは，［それが解釈するものの］意味は決定しないのである。(『探究』第198節)

もし解釈だけでは，規則の意味を固定するのに，十分ではないとすれば，その他に何が必要なのか。ウィトゲンシュタインの答えは，規則の意味を固定するのは個々の場合において規則を適用する我々の通常の仕方である，というものである。我々が「規則に従う」と言うところの，行為の仕方が存在するのである。無限に多くのその他の行為の仕方も可能で

ある。しかし我々はそれらを「規則に従う」とは言わないのである。(原本154—155頁)

マルカムによれば，ウィトゲンシュタインは，彼が「我々のパラドックスはこうであった。」として言うところのパラドックス——「規則は行為の仕方を決定できない，何故なら，如何なる行為の仕方もその規則と一致させられ得るから。」——は誤解である，としているのである。そしてその証拠としてマルカムは，次のパラグラフのウィトゲンシュタインの文章「ここには或る誤解がある，」を引くのである。そうだとすれば当然，ウィトゲンシュタインはこのパラドックスに積極的な価値を認めていない事になる。事実マルカムは，「ウィトゲンシュタインは，如何なる行為の仕方も規則と一致するのだ，というパラドックスを是認してはいなかった。そうではなく彼は，このパラドックスは，もし規則を理解する唯一の道は，それについての解釈を与える事である——即ち，規則の或る定式を他の定式で置き換える事である——とすれば，その結果として生ずるものであろう，と言っていたのである。」と言うのである。ここで，「規則を理解する唯一の道は，それについての解釈を与える事である——即ち，規則の或る定式を他の定式で置き換える事である」という考えを「解釈説」と言うことにすれば，マルカムによれば，パラドックスは解釈説の必然的結果である，という事になる。この場合，パラドックスは誤解である，と言う事は，解釈説は誤解である，と言う事と，同じ事であろう。

マッギンの言う事も，マルカムと同様である。彼は『ウィトゲンシュタインの言語論』の第2章において，『探究』の第201節を引用して，言っている。

この部分［第201節］には，クリプキの解釈が偽であることを示すところの，注目すべき二つの事がある。第一に，ウィトゲンシュタインはパラドックスを述べたすぐ後に，その述べられたパラドックスは「誤解」――即ち，間違った前提――から生じている，という事を明らかにしている。それ故，彼がこのパラドックスを実際に是認しているという事はあり得ない。ヒュームが因果律についての彼自身の懐疑的主張を受け入れていた様に，ウィトゲンシュタインは彼のパラドックスを受け入れていた，という訳ではないのである。第二に，もし我々が，その誤解とは何か，と問えば，それは，規則を把握するという事は記号を解釈する事である，即ち，記号を他の記号と結合する事である，と想定する誤りである，と言われるのである。ウィトゲンシュタインの考えでは，我我がこの想定を強制される謂れはないのである。……パラドックスは，規則を把握するという事の本性に関するこの特定の誤解の不可避的な結果なのである。（原本68頁，訳102―103頁）

要するにマルカムもマッギンも，ウィトゲンシュタインのパラドックスは解釈説という誤解の産物なのであり，ウィトゲンシュタイン自身この事を十分に知っていた，と言うのである。マルカマとマッギンの間の違いと言えば，マルカムは「誤解」としてパラドックスを考え，マッギンは「誤解」として解釈説を考えている訳であるが，この違いは，彼らにとっては本質的ではないであろう*。

* しかしその他の点――例えば，私的言語論――においては，マルカムはマッギンを徹底的に批判している。

3．「ウィトゲンシュタインのパラドックス」は誤解の産物か

しからば，ウィトゲンシュタインが「我々のパラドックスはこうであった。」として言うところのパラドックス――即ち，「ウィトゲンシュタインのパラドックス」――は，クリプキが言うように，「或る新しい形の懐疑論」であり，「かつて哲学が遭遇した最も根源的で独創的な懐疑的問題」なのであろうか，或いは，マルカムとマッギンが言うように，単に誤解の産物に過ぎないのであろうか。

そこで，ウィトゲンシュタイン自身の文章よくみてみよう。ところがそれは，ものすごく錯綜しているのである。以下は，第201節を中心にしたウィトゲンシュタインの文章の私の解読である。

彼は第201節において，次の様に言う。

> 我々のパラドックスはこうであった。規則は行為の仕方を決定できない，何故なら，如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得るから。（1）

彼は，「我々のパラドックスはこうであった。」として，過去形を使っている。しからば彼は前の何処で「我々のパラドックス」を語っていたのか。それは，疑いもなく第198節において，である。そこで彼は，彼の対話者に次の様に言わせているのである。

> 「しからば，如何にして規則は私に，私はここにおいて何を為すべきか，を教えるのか。たとえ私が何を為そうと，それでもそれは，何らかの解釈によって，その規則に一致させられ得るのである。」（2）

この（2）が実質的に（1）と同じである事は，明らかであろう。

しからば，第201節の次の文章はどうであろう。即ち，

そして返答は，こうであった。もし，如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得るならば，如何なる行為の仕方もその規則に一致しないようにさせられ得るのであり，それ故ここには，一致も不一致も存在しない。（3）

はどうでるろう。この文章も過去形になっている。しからば前の何処で，これと同じ事が言われていたのか。それは当然さきの（2）に続く部分において，であろう。そこで，さきの（2）に続く部分を辿ってみよう。すると，次のパラグラフの冒頭の部分で，（3）につながる事が分かる。そこまでの部分は次の様である。

違う。その様に言われてはならない。そうではなく，次の様に言われなくてはならない。如何なる解釈も，それが解釈するものと共に，空中に浮かんでいるのである。如何なる解釈も，それが解釈するものの支えの役は，果たし得ないのである。解釈だけでは，［それが解釈するものの］意味は決定しないのである。（4）

「だからこそ，たとえ私が何を為そうと，私が為した事は，規則に一致させられ得るのではないのか。」（5）

言うまでもなく（5）はウィトゲンシュタインがその対話者に言わせている台詞である。そしてウィトゲンシュタインはそれを受けて，（3）において，

もし，如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得るならば，如何なる行為の仕方もその規則に一致しないようにさせられ得るのであり，それ故ここには，一致も不一致も存在しない。（6）

と言うのである。したがって（3）の「そして返答は，こうであった。」という部分は，厳格に言えば正しくない事になる。厳格には，ウィトゲンシュタインは次の様に言うべきではなかったのか。

そして［対話者の］返答は，こうであった。如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得る。しかし，もし，如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得るならば，如何なる行為の仕方もその規則に一致しないようにさせられ得るのであり，それ故ここには，一致も不一致も存在しない。

さて，次は問題の部分である。ウィトゲンシュタインは次の様に言う。

ここには或る誤解がある，という事は，我々はその思考過程において——それぞれの解釈が，その背後に再び或る解釈を考える迄は，少なくとも一瞬は我々を安心させるかの如くに——解釈に次ぐ解釈をしているという事の中に，既に示されている。（7）

問題は，「ここには或る誤解がある，」と言うときの「ここ」とは何処か，という事である。それは，（7）が言う事からして，解釈に次ぐ解釈をしている箇所であろう。そしてそれは，直前の

もし，如何なる行為の仕方もその規則に一致させられ得るならば，如何なる行為の仕方もその規則に一致しないようにさせられ得るのであり，それ故ここには，一致も不一致も存在しない。（6）

ではないのか。規則と行為の仕方の間の一致と不一致は，両者の間を解釈に次ぐ解釈で繋げるか外す事によって，可能になるのであるから。そして勿論そこには，「規則を理解する唯一の道は，それについての解釈を与える事である」という「解釈説」が前提されている。そうであるとすれば，「ここには或る誤解がある，」と言うときの「誤解」とは，「解釈説」の事であろう。

さて，ウィトゲンシュタインによれば，解釈説は誤解なのである。規則を「理解する」或いは「把握する」とはどういう事か，という事に関する誤解なのである。そこでウィトゲンシュタインは次の様に言うのである。

この事を通して我々が示す事は，こうである。規則の或る把握がある。それは，解釈ではなく，規則のそのつどの適用において我々が「規則に従う」と言い「規則に反する」と言う事の中に現れるものである。（8）

ここにおけるウィトゲンシュタインの推論は，こうであろう。もし解釈説が正しいとすれば，規則と行為の仕方の間には一致も不一致も存在しない事になる。即ち，両者の間は無関係である事になる。しかし，これはおかしい。規則と行為の仕方の間には，何んであれ，何んらかの関係がなくてはならない。それ故，解釈説は正しくない。そこで，規則を把握するとは

どういう事か，という事について，新しく考え直さなくてはならない。かくして出てきたのが，「規則のそのつどの適用において我々が『規則に従う』と言い『規則に反する』と言う事の中に現れるもの」としての「規則の把握」なのである。「規則の把握」についてのこの考えを「実践説」と言う事にする。何故ならウィトゲンシュタインは，第202節において，次の様に言っているから。

「規則に従う」という事は，［解釈ではなく］実践である。（9）

ウィトゲンシュタインによれば，「規則に従う」という事は「規則に従う」と言われる一個の実践なのであり，「規則の把握」はそこにおいて示されるのであるから。

さて，以上のようであるとすれば，ウィトゲンシュタインが「誤解」と言ったものは，確かに「解釈説」ではあるが，それがもたらすものは，「規則は行為の仕方を決定できない。」というパラドックスではなく，「規則と行為の仕方の間には一致も不一致も存在しない。」という事であろう。規則と行為の仕方は無関係である，という事であろう。そうであるとすれば，パラドックスは，マルカムやマッギンが言うように，単なる誤解の産物ではなく，クリプキが言うように，重大な意味を持ち得るのではないのか。

4．「ウィトゲンシュタインのパラドックス」はパラドックスか

ウィトゲンシュタインは新しく「実践説」を提唱した。それは，或る人が或る規則を把握しているという事は，その人の行為において示される，という考えである。そして，解釈説からこの実践説への転換は，まさにコペルニクス的転回なのである。何故なら，解釈説では，規則の把握が行為

を決定すると考えるに対し，実践説では，行為が規則の把握を決定すると考えるのであるから。解釈説では，或る人の或る規則の把握――それはその規則についての解釈である――が，その人の行為を決定すると考えているのに対し，実践説では，或る人の或る行為が，その人がその規則をどう把握しているのかを決定すると考えるのである。

しからば実践説では，そもそも何が実践を決定するのか。それに対するウィトゲンシュタインの答えは，何ものも実践を決定しない，というものであろう。彼は『探究』の第217節において，次のように言っている。

「私が規則に従う事は如何にして可能か。」――もしこれが原因についての問いでないならば，それは，私はその規則に従ってその様に行為する，という事についての正当化に関する問いである。

もし私が正当化をし尽くしてしまえば，今や私は堅い岩盤に達しているのであり，私の鋤は反り返っている。そのとき私は言いたい。「私はまさにその様に行為する。」

私が規則に従って行為するとき，結局は「まさに」その様に行為するのである。そこには，真の意味では正当化も理由も根拠もないのである。

クリプキはこの論点を，語の使用という行為の場面で，次のように言っている。

ウィトゲンシュタインは（『探究』の第289節において）言っている。「或る語を正当化（Rechtfertigung）なしに使用するという事は，その語をzu Unrecht に使用する，という事ではない。」この「zu Unrecht」に関するアンスコムの翻訳は，首尾一貫していない。『探究』の翻訳にお

いては，その第289節において，彼女はそれを「without right（正当な権利なし)」と訳している。しかし『数学の基礎に関する考察』の翻訳においては，ほとんど同じドイツ語の文章が出て来る第Ⅴ部の第33節(第3版では第Ⅶ部の第40節）において，彼女はそれを「wrongfully（不当に)」と訳してい。……しかしウィトゲンシュタインが「zu Unrecht」によって意味している事は，独立な正当化なしに或る語を使用する事は，その語の「wrongful（不当な)」使用――本来の認識的あるいは言語的支持なしの使用――である必要はない，という事であるように思われる。ところが実際には，ある場合には，独立な正当化なしに或る語を使用するという事は，不当な使用である必要はないどころか，全く正当なのである，という事こそ，我々の言語の働きにとって本質的なのである。

（『ウィトゲンシュタインのパラドックス』原本74頁，訳144―145頁）

ここで言われている事は，ウィトゲンシュタインによれば，正当化なしの行為は不当な行為ではないのであり，クリプキによれば，正当化なしの行為は全く正当な行為なのである，という事である。行為は，正当化も理由も根拠もなしに，「まさに」行われるのである，というわけである。言い換えれば，何ものも行為を決定しない，というわけである。

しからば，その様な「まさに」行われる行為が「不当な行為ではない」と言われ，「正当な行為である」とさえ言われるのは，何に依ってであるのか。ここで我々は，さきに引用した第217節を良く読んでみよう。すると，そこで言われている「正当化」は行為の前の正当化であることが分かる。そこでは，「もし私が正当化をし尽くしてしまえば，……そのとき私は言いたい。『私はまさにその様に行為する。』」と言われているのである。この事は，同じ論点を述べている第211節をみれば，なお一層明らかにな

る。そこでは，次のように言われているのである。

「一体君は，彼に連続模様の先を続ける事を，如何にして教えるのか。——彼は，自力で連続模様の先を如何に続けるべきかを，如何にして知り得るのか。」——さて，私はそれを如何にして知っているのか。——もしこれが「私は根拠を持っているか。」という問いであるならば，答えはこうである。根拠は間もなく無くなるであろう。そして私は，その時は，根拠無しに行為するであろう。

そうであるとすれば，正当化なしに「まさに」行われる行為について，それが「不当な行為ではない」とか「正当な行為である」とか言われるのは，その行為の後からである事になる。行われた行為について，後から「不当ではない」とか「正当である」とかと言われるのである。しからば，何を規準にしてその様に言われるのか。

或る人が或る行為を正当化なしに「まさに」に行う。このとき勿論その人は，その行為が正当なものである事を，信じているであろう。しかし，本人が信じていても，その行為は正当化されはしない。しかし，その行為を見ていた人々がみな，自分もそうする，と言えば，その限りにおいて，その行為は「不当ではない」とされるのである。即ち，正当化なしの行為が正当化なしではない事になるのである。そして，そのためには，共同体の存在が不可欠なのである。

以上のようであるとすれば，実践説においては，行為は「まさに」行われるのであり，そしてその「まさに」行われた行為において，その人が規則をどう把握しているのかが示されるのである。勿論その人は，その行為をするとき，如何なる規則に従おうとしているのかを自覚している事もあ

る。しかし，たとえその様な自覚を持っていようとも，行為それ自体は，その自覚とは無関係に，正当化も理由も根拠もなしに，「まさに」行われるのである。言うなれば，彼はその様な自覚を持ち，そして，「まさに」行為をすのである。

そんな馬鹿な事はない，シカジカの規則に従おうとしているならば，そしてその事を明確に自覚しているならば，我々はその規則に必ず従うのであり，その自覚と行為は無関係ではない，と言われるかも知れない。しかし，自覚された規則は，様々に解釈され得るのであり，為すべき行為と一意に結合されている訳ではない。行為は依然として「まさに」行われるのであり，そこにおいて初めてその人の規則の把握が示されるのである。そしてその時，その行為は「規則に従っている」と言われるのである。

この様な規則把握の考え——実践説——が腑に落ちない人は，ここで「行為」と言うとき，そこで意味されているのは「主体的な」実践であり，行為であって，他人のそれを外から対象化して眺めているのではない，という事を心に留めなくてはならない。確かに，規則が行為を決定するという事は有り得る。しかしそれは，他人の行為を第三者として客観的に眺めているとき，なのである。この点については，ウィトゲンシュタインは次のように言っている。

> 我々は「[数列の] 次々の段階は式……によって決定される。」という表現を用いる。この表現は如何に用いられるのか。——我々は，例えば，次のように言う事が出来よう。人々は教育（訓練）によって，式 $y=x^2$ を用いるようにさせられるのであるが，その際人々は，x に同じ数を代入すれば，y として同じ数を計算して出すように，なっているのである。或いは，我々は次のように言う事も出来よう。「これらの人々は，

『+3』という命令に対し［数列の］同じ段階で同じ数を与えるよう，訓練されている。我々はこの事をこう表現出来よう。命令『+3』は，その様な人々における或る数からその次の数への移行を，全て完全に決定している。」（『探究』第189節）

しかし，他人からは確かにそう見えようとも，「+3」という命令に従っている当人は，やはり「まさに」計算をし，「まさに」答えを出しているのである。なお，規則と命令が同じ種類のものである事は，明らかであろう。（『探究』第206節参照）*

* なお，ここで注意しておくべき事がある。それは，ウィトゲンシュタインが第198節において，規則の表現と私の行為「の間には如何なる結合があるのか，」と問い，それに答えて「私はこの記号に対して一定の反応をするように訓練されている，そして，私は今そのように反応するのである。」と言っている，という事である。ここにおいては，規則が私の行為を決定する一つの仕方が，述べられているのである。しかし，他人からは確かにそう見えようとも，私自身としては，やはり「まさに」行為をしているのである。

さて，以上のようであるとすれば，実践説においては，「規則は行為の仕方を決定できない」という「ウィトゲンシュタインのパラドックス」は，実はパラドックスではなく，当然の事実であることになる。それは，よく見れば，論理的に必然的な事実なのである。しからば，何故人々は「規則は行為の仕方を決定できない」という事実にパラドックスを感じるのであろうか。それは，人々の心に「規則は行為の仕方を決定できる」という主知主義的な考えが潜んでいるからであろう。そして，この様な考えは幻想

なのである。

しからば，何故ウィトゲンシュタインは「規則は行為の仕方を決定できない」という事を「パラドックス」と言ったのか。彼は，それが実は本来の意味でのパラドックスではない事を，知っていたと思われる。私が思うに，彼は「パラドックス」という語を単にレトリックとして使ったのである。彼が第201節において「パラドックス」という語を使ったのは，単に第198節の論点を強調するレトリックとして，ではなかったのか。だからこそ彼は，それ以後その意味で「パラドックス」という語を二度とは使いはしなかったのである。そしてクリプキは，このパラドックスに新しい形の「懐疑論」を見たのである。確かにそれは懐疑論である。ヒュームの懐疑論がそうであるように，分かってしまえば平凡な事実であるところの，懐疑論なのである。

注

（1） Kripke, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, p. 60.（訳117頁）。

（2） Ibid., p. 55.（訳108頁）。

（3） Ibid., p. 62.（訳122頁）。

（4） Ibid., p. 7.（訳11頁）。